

色彩の詩

「色彩の追求、色彩の画面での決定が即ち造型を究める手段でありタブローの骨格をなし、デッサンでありもするのです。色彩が快い詩を唄ひださなくては^{タブロー}絵画は軌道に乗らないのです。」(*1)と語り、色彩の重要性を説いた節子。節子にとっての色彩について考察します。

節子の「黄色」

節子と夫・好太郎(1903-1934)との間に生まれた長男は、二人が憧れた地に由来して「巴里」と名付けられましたが、好太郎の死後、彼が最も愛した色から節子によって「黄太郎」と改名されました。わが子の名に冠するほど、黄色という色は節子と好太郎にとって特別な色だったのです。

節子の作品にも、黄色が特徴的に使われている作品が各時代に登場します。初期の《静物》[No.5、右掲図]を描いた頃の節子は、自ら「黄色病にとりつかれておりました。」というほど、黄色に夢中になり研究を重ねていました。「オーレオリンに僅か赤色をまぜることによって、黄金のように柔らかな暖かい雰囲気を生じるのがうれしかったのです。」(*2)との言葉からも、黄色の変化を楽しみながら描いている様子が想像されます。

1968(昭和43)年、63歳で二度目の渡仏をし居を構えたカーニュでは、ミモザの花を思わせる黄色が印象的な作品を残しています[No.13]。その後、69歳でブルゴーニュ地方の小村・ヴェロンに移り住むと、そこで見た風景の感動を黄色に託して表現しました。《ブルゴーニュの麦畑》[No.18]では、黄色に褐色を重ねて黄金色に実る麦を描き、《ブルゴーニュにて》[No.22]では、鳥たちが飛び立つ緊迫感あふれる場面に、明るい黄色が詩情を添えています。

節子が最期に手掛けた絶筆《花(絶筆)》[No.25]が黄色い花だったのも、節子と黄色の深い縁を感じさせます。



《静物》1948年 ©MIGISHI

節子の「赤」、「白」

「あの赤い花、いのちをもらったみたいです。」(*3)とは小説家・井上靖(1907-1991)が節子から贈られたという赤い花のリトグラフを前に、記者に語った言葉です。1988年当時、肺がん闘病中だった井上は、自身に残された時間が限られているのを悟りながらも、節子の赤い花から生きる力を感受し、執筆への意欲を燃やしました。節子の赤い花は、花の生命力とともに、画家の生きること、描くことに対する強い思いを謳い上げ、見る者に力を与えてくれます。

赤い花のイメージが強い節子ですが、意外にも本人は白い花を最も好み、作品にも多く描いています。

私は白い花が一番好きである。白い花にわが生命をこめる。そのときのさまざまな心の動きをこめて描く。悲しいとき、生きているのが堪えられぬとき、生命のぎりぎりのとき、白い花を描く。(*4)

静謐さを湛えた節子の白い花は、その静けさの中に節子の心情を物語っています。[No.20、右掲図]



《花(ヴェロンにて)》1988年 ©MIGISHI

節子にとっての「色彩」

戦時中には絵具の入手にも事欠き、身の周りからも色彩が欠乏していたという節子は、終戦後再び色彩にふれたときの喜びをこう述懐しています。

終戦後はじめてフランス大使館で見た近着の画集は、私の目が蘇生の歓喜にふるへたほどである。色彩といふものがどんな深い歓びであるか、この時のおどろきを私は終生忘れ得ないであらう。(*5)

このとき節子は、自身の絵画が色彩を失っていたことに気づき、その後徐々に色彩の喜びを取り戻していきます。

常に人間は美を求め、美しさへの欲求を渴仰してゐるのです。美は人間の心呼びさます^{ともしび}燈なのです。美はいつも快感を伴ふ。ですから私どもの生活のなかにも、常に色彩のもつ美しさを常に心してとりいれなければなりません。色彩は絵画や流行の衣裳のなかばかりにあるのではなく、生活をうるほすあかりなのです。(*6)

節子にとって「色彩」とは、絵画の中だけでなく、生活の中にも必要な「美」そのものであり、それが人間としての心呼び覚ます、人間の存在証明のようなものだったといえるでしょう。

当館学芸員 野田路子

(*1) 三岸節子「静物画家の独白」『花より花らしく』求龍堂、1977年、21頁

(*2) 『日本現代画家選Ⅱ8 三岸節子』美術出版社、1954年

(*3) 吉武輝子「炎の画家 三岸節子」文藝春秋、1999年、11頁

(*4) 「花譜12ヵ月 2月 白い花」『未完の花』求龍堂、1994年、21頁

(*5) 三岸節子「色について」『美神の翼』求龍堂、1991年、213頁

(*6) 前掲書、「色彩の輝き」、122頁